

● 通常の学級に在籍する児童生徒の事例

(小学校) 気持ちを落ち着かせる時間の確保
(ADHDの傾向がある児童が) 暴れてしまうことがあったが、できるだけ気持ちを落ち着かせる時間を確保するよう努めた。周りの児童に該当児童の良さを認めてもらうように働きかけることで、本人のストレスが減った。

(小学校) 支援員の配置
(肢体不自由の児童に対して) 支援員を付けることで、日常生活の安全確保を行い、通常の学級で学習している。成長とともに歩行も安定してきている。

(小学校) 特別な椅子、机、昇降機、トイレの手すり等の整備
(肢体不自由の児童に対して) 上記の環境整備により、学校生活をスムーズに送れるようになっている。また、他の児童が声をかけ、手助けする姿も見られる。

(中学校) クールダウンのための場所を準備
(ADHDの生徒が) 気持ちの切り替えがスムーズにできるようになってきている。

(中学校) 学年集会等で当該生徒とのコミュニケーションの取り方について具体的に指導
(自閉症スペクトラムの生徒に対して) 周りの生徒は、障害による特性を個性と受け止め、必要な支援を自然に行っている。

(小学校) 昇降機の設置
(肢体不自由の児童が) 車いす、昇降機を利用している。本人が自力で移動するが、友達が手伝ったり、見届けたりする場面も見られる。

(小学校) 担任による苦手分野のサポート、クールダウンの場所の確保
(情緒障害の傾向がある児童に対して) 児童の特性に応じた支援(例: 視写が苦手なため、視写する部分を指定したり、事前にノートのコピーを渡したりする)を行うことで、落ち着いて学習することにつながった。

(小学校) 拡大読書器を使用、市費臨時職員の配置
(弱視の児童に対して) 上記の支援により、通常の学級で共に学んでいる。

(小学校) イヤーマフの使用
(聴覚情報の過敏がある児童に対して) 交流及び共同学習で、特別支援学級在籍の児童と共に学んでいる際、その児童がイヤーマフを使用している様子を見て、「自分も使ってみたい」と申し出たことで、合理的配慮につながっている。

● 通常の学級に在籍する児童生徒の事例

(小学校) 児童の実態に応じた学校行事の工夫
学級会や運動会で行事を企画する際に、車イスを使用する児童や弱視の児童でも取り組むことができるゲームを中心にするなど、特別支援教育コーディネーターが職員会議で呼びかけたり、校内研修で取り組んだりした。

(小学校) 児童の実態に応じた学習内容の調整等
障害に合わせて、学習の量を調整したり、鉛筆ではなくタブレットを使うなどの学習方略を変えている。その結果、障害のある児童にとっても「できた」と思える支援に繋がっている。また、協働的な学びの視点として、できることでの役割分担をすることでお互いのよさを認め合える活動となっている。

(小学校) 児童の実態に応じた学習環境の調整
車イスの児童の席について、保護者の方と相談し、廊下側の入りやすい位置に設置している。また、車椅子のお子さんの在籍学年・学級を1階に配置している。

(小学校) クールダウンのための環境設定
教室から飛び出してしまうことが多かった児童が、落ち着いて授業へ参加できるよう、自席付近へ人工芝を設置し、感覚を楽しむなど、本人が落ち着くことのできるスペースを設けるようにした。また、プレイルームを準備し、少し体を動かし、クールダウンしてから帰ってくるようにした。

(学校種不明) 手話を活用した障害理解
難聴の児童が在籍している学級にて、周りの友達が手話を少しずつ覚え、手話でのコミュニケーションに取り組んでいる。少しでも手話に触れることで聴覚障害について理解できるようになっている。

(学校種不明) 合理的配慮に対する周囲の理解
障害のある子どもに対する合理的配慮を周りの児童・生徒が受け入れる学級、学校の雰囲気を作っている。障害のある児童・生徒も自分らしさを受け入れ前向きにチャレンジすることができた。自閉・情緒の児童が、通常級であっても、大きく成長できた。

(学校種不明) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた教室の環境設定
棚のカーテンを設置するなど、教室前面の環境を整備することで、みんなが授業に集中しやすいように、配慮をしている。

(小学校) 児童生徒の実態に応じた学習環境等の調整
ユニバーサルデザインの視点で教室掲示や児童生徒への声かけを行うとともに、実態に応じて、タブレットの活用や、イヤーマフ、クールダウンスペースを活用できるようにしている。周りの子への理解も図っている。また、医療的ケアの看護師配置、特別支援教育支援員の配置も行っている。通常の学級において、車イスを使用し、医療的ケアを必要としている児童が学んでいる。